

愛成学園・愛成ホーム
くりっく・トトロのいえ
スミレのいえ
くるみのいえ・つむぎへと
そしてこれから



愛成学園 施設長 片山 泰伸

私達の仕事。この仕事は、誰にも出来るけれど、誰にも出来ない仕事。でも、仕事の中味は、支援を必要とする人達のありふれた日常の中での普通の声を聴き、そして実践（実現）していくという極々当たり前のこと。しかし、仕事を『稼ぐ』と考えるか、『働く（他を楽にする）』と考えるかでも随分と違って来る。

関わりの中でも二つの言葉がある。一つは、『仕事の言葉（専門性）』で、一つは『暮らしの言葉』。スタッフが『仕事』と割り切ってしまうと、そこには『暮らし』が感じられない領域が出来てしまう。しかし、『仕事』という認識が無いと緊張感がなくなる。

利用者の声に寓直なくらいに関わりをもつと、『施設』から『地域』へということはあるけれど、もちろん『施設』が良いという利用者は『施設』でも良いだろう。ただ、体験をするということは必要ではないか。一方、障害を抱えた本人、家族にとって、『生まれた地域で暮らしたい』という声も極々当たり前のこと。そこには相談事業が欲しい。

山登りは、一番ペースの遅い人に合わせるという。誰もが安心して暮らせる地域、人に優しい国造り。『施設』『GH』『支援センター（相談事業）』等、それぞれがそれぞれの役割を果たしていく。その結果、流れは自然に生まれてくる。『必要は発明の母』。

何が、これまでこの流れを創ろうとしなかったのか。人間のもつ性だろう。弱さか。意識。自問自答。しなやかな、さわやかな、大らかな、利用者は私達を確かに人間として育んでくれる。人に優しい街づくりを提案してくれる。その声を出来るだけ実現していきたい。